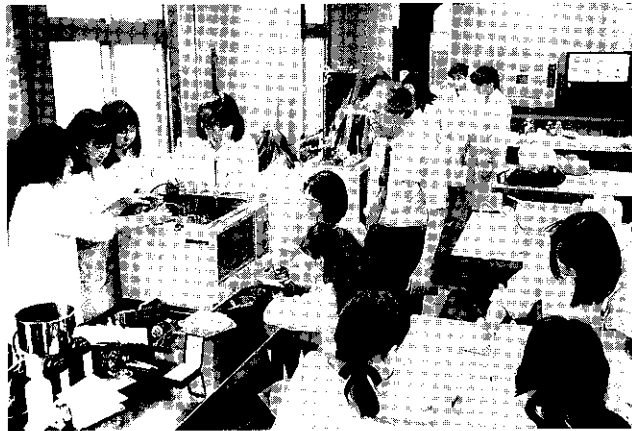


RI*WAC

Research Institute for Women and Careers

日本女子大学現代女性キャリア研究所

RIWAC 管理番号	RJO0029
調査タイトル	「通信教育課程卒業生に対する調査」
論文／雑誌名	3「通信教育課程卒業生に対する調査から」 (「Ⅲ家政学部卒業生実態調査からみる家政学部像」の一部) 『日本女子大学家政学部 100 年の歩み』
著者	真橋美智子
掲載ページ	pp.142-146.
発行年	2006.05
出版社	日本女子大学家政学部 100 年研究会



被服学科（被服材料学実験）1989年



家政経済学科（経済学・生活論演習）1995年

日本女子大学進学説明会同時開催
家政学部シンポジウム
「21世紀をどう家政学」

**JULY 25
2000**

日本女子大学家政学部のめざすもの
—環境について考える—

家政学部の各学科で代表する専攻5人が「環境」をテーマとして家政学の現場からの取り組みを語ります。質疑の企画もお持ちしています。

開催日時 7月25日（水）11:00～12:30
場所 日本女子大学目黒キャンパス 講義棟 401教室

シンポジスト
児童学科 橋本 田島教授
食物学科 大庭ひる恵教授
住居学科 室谷三智子助教授
被服学科 佐々井 啓教授
家政経済学科 横田敏子教授

受付 自由会場にお越しください
家政学部100周年記念品も販売いたします

主催 日本女子大学家政学部 家政学部各専攻
〒152-8501
文京区目黒2-2-1
電話 03-3842-3121（代表）
http://www.jfu.ac.jp



家政学部を考える会シンポジウム 2000年



家政学部共通（コンピュータ）2000年

目次

はじめに	江澤郁子…………… 3
I 創業者成瀬仁蔵の家政学部構想	一番ヶ瀬康子…………… 5
II 家政学部の教育内容およびその変遷	
1 旧制	館岡孝、赤塚朋子…………… 10
2 新制	宮崎礼子、赤塚朋子… 26
3 通信教育課程	赤塚朋子…………… 85
III 家政学部の卒業生実態調査からみる家政学部像	
1 大正期および昭和前期の本学卒業生に対する調査から	真橋美智子… 95
2 新制家政学部卒業生に対する調査から	沖田富美子、塚原典子…111
3 通信教育課程卒業生に対する調査から	真橋美智子…142
4 家政学研究科修了生に対する調査から	佐々井啓…147
IV 家政学部卒業生の社会的展開	
1 学位取得者に関する調査	館岡孝…153
2 外国人留学生について	大野静枝…161
3 旧制・新制・通信教育—卒業後の社会的活動領域	宮崎礼子…163
V 今後の家政学部に向けて	
1 学部として	大野静枝…171 江澤郁子 佐々井啓
2 各学科より	
児童学科	石井光恵…173
食物学科	丸山千寿子…174
住居学科	定行まり子…175
被服学科	大塚美智子…177
家政経済学科	堀越栄子…178
おわりに	江澤郁子…181
資料 日本女子大学家政学部 100年の年表	赤塚朋子…183

3. 通信教育課程卒業生に対する調査から

1) 調査の目的及び方法

日本女子大学通信教育の起源は、創立者成瀬仁蔵の「大学拡張」の教育理念に基づき1908（明治41）年に発足した「女子大学通信教育会」による『女子大学講義』の発刊にさかのぼる。そのねらいは第一に、卒業生が卒業後も生涯発展していくための指導・参考となるように、第二に高等教育を希望するものへの予備的教育、あるいは希望しつつそれが無理な者への学習機会の提供にあった。

第二次大戦後、日本女子大学が新制大学として発足した翌年の1949年1月、家政学部通信教育部として再出発し、今日に至っている。わが国初の四年制大学家政学部通信教育で、児童学科、食物学科、生活芸術学科から構成されている。

その通信教育課程卒業生の全体的な傾向と特質を明らかにし、通信教育課程がどのような卒業生を送り出してきたのかを探ることが本調査の目的である。

調査は、1953年3月から1992年3月までの通信教育課程卒業生（1回生から40回生）の中から4分の1の抽出による1271名を対象者として、2000年5月から同年6月末日までに郵送法にて実施した。有効回答数は537票（児童199票、食物225票、生活芸術113票）、回収率は42%である。

2) 調査対象者の概要

対象者の入学前の出身校は「短期大学」と「全日制高校」が多く、両者で約70%を占めるが、旧い回生では「旧制女学校」「旧制女子専門学校」「師範学校」などの旧制度の学校出身者もみられ多様である。出身校とも関連して入学形態では、「1年次入学」と「編入学」で90%以上を占め、「学士入学」は少ない。入学時の年齢も、「19歳以下」から「50歳以上」までと幅広いが、「20から24歳」の年齢層が最も多く、24歳以下の入学者が全体の半数を、その一方で30歳以上が約1/4を占める。通信教育課程（以下「通信」）の場合、もともと出身校や取得単位数により修業年限は2年から4年と幅があるが、実際の在学期間では「4年から5年」が最も多く、「6年から7年」と続くが、10年以上の在学も10%以上を占め、各学生の事情により差は大きい。

入学時に職業を持つ者は全体の約80%で、食物学科の有職率が最も高いが、全体的に近年は減少傾向にある。その職種は「教員」が最も多く、「事務・秘書」「栄養士」と続くが、「教員」は減少傾向にある。学科別では生活芸術学科に「教員」が、児童学科に「事務・秘書」が、食物学科に「栄養士」が3学科中最も多い。入学時の職業を在学中も継続した者は80%以上を占めるが、その一方で10%の者が転職し、8%の者が退職し

ている。

なお現在の生活については、対象者の80%以上が既婚者で、その子どもは2人が最も多い。また家族の人数は2人が最も多く、次いで4人である。

3) 入学前の家政学部像

では対象者は入学前にどのような家政学部像を抱いていたのか、学科選択の動機から探っていくが、その前に「通信」を選択した理由を検討する。「通信」の選択理由としては「職業と両立できる」が最も多く、以下「家庭の事情に応じて学べる」「仕事の事情に応じて学べる」「生涯学習として学べる」の順である。入学者が多様で有職者も多いことから、職業や家庭との両立が重視されているが、その一方で生涯学習のために入学する者も増加傾向にある。学科別では「職業と両立できる」は食物学科に最も多く、「家庭の事情に応じて学べる」が児童学科に、「生涯学習として学べる」は生活芸術学科にやや多い。

「通信」は児童・食物・生活芸術の3学科から構成されるが、学科を選択した動機（複数選択）では、「専門の勉強がしたかった」が最も多く、次いで「資格、免許を取りたいと思って」が続き、専門や資格・免許という職業につながる動機が共に50%以上と他を大きく上回っている。他には「自分の適性に合っている」「社会的視野を広げる」「将来社会の役に立ちたい」「女性としての将来に役立ちそう」などの動機が続いている。学科別では食物学科に「専門の勉強」が、生活芸術学科で「資格、免許」が多くなっている。

以上のような結果から、職業や家庭との両立や生涯学習などを目指す「通信」入学者では家政学部の各学科に対して専門性や免許（教員）取得を期待する者が多いが、その一方で社会的視野を広げ、社会に役立つこと、女性の生活に役立てることも期待している。つまり家政学部は専門を身につけ免許が取得できる学部であり、同時に幅広い教養と女性の将来の生活に関わる内容が学べる学部と捉えられている。

4) 大学在学時の家政学部像

では「通信」の教育はどのように受けとめられているのか、家政学部の「共通専門科目の履修」および「学んでよかった点」「問題点」の自由記述から探り、大学在学時の家政学部像を検討する。

「通信」でも家政学部の共通専門科目を履修するが、全体の90%以上の者がそれを肯定的に評価している。評価の具体的内容としては「教養が身についた、視野が広がった」が最も多く、次いで「学んでよかった」で、以下「当然だと思って履修した」「家政学の基礎、全体を学んだ」「自分の専門以外の学習ができた」の順である。多くの者が家

政学を広く学び、教養が身についたと評価している。

「通信」で「学んでよかった点」では「スクーリング」に関するものが最も多く、次いで通信の「教育」に関するもの、通信独自の「学習形態」に関するものが多く、以下「職業・資格取得」「卒業できたこと・その自信」「人間形成・価値観」「学ぶ喜び・生涯学習」「校風・教育理念」の順である。特にスクーリングにおける「友人・仲間」との交流や「教員」との出会いをあげる者が多い。職業や家庭と両立しながら通常は自宅で学ぶ学生たちにとって、多くの仲間と出会い、直接教員の講義を受講でき、実験や実習を体験できる夏期スクーリングが大学生活に刺激を与え、学習継続の大きな支えとなっている。学習形態については「自分のペースで学べる」ことが最も評価されている。教育面では「専門教育」をあげる者が最も多いが、同時に「教養・広い視野」を評価する者も多くみられる。

一方「問題点」ではよかった点同様に「スクーリング」に関するものが最も多く、次いで「教育」に関するもの、「学習継続」に関するものが多く、以下「職業・資格取得」「通信に対する偏見」「友人との交流」「教員とのふれあい」の順である。こうしてみると「通信」の利点は同時に問題点にもなっている。つまり大学生活に刺激を与え、学習継続の支えになるはずのスクーリングへの「参加が困難」であること、学習継続に関して「自分のペースで学べるが、意志を強く持たないと誰も促してくれないので挫折しやすい」といった「独学の困難」や「職業との両立」の困難さが問題点として指摘されている。教育面でも「試験・レポート」や「質問・指導」への対応に不満があり、「学力不足、学習が深まらない」ことも問題とされている。

以上のように、「通信」の教育に対して、共通専門科目の履修を通して家政学を広く学び教養が身についたと評価する者が多く、教育の専門性や資格取得、同時に教養や広い視野、人間形成面でも評価する者が多い。これは入学前の家政学部像に共通する。しかしその一方で、職業や家庭と両立できるから選択された「通信」という独特の教育・学習形態においても学習継続の困難、免許のための教育実習参加が困難、さらには学力不足などの問題が生じている。

5) 卒業時の家政学部像

卒業時の家政学部像について、卒業直後の進路から探ってみる。卒業直後には「それまでの職業を継続した」が最も多く、次いで「新たに職業について」で、職業生活を選択した者が70%以上を占めているが、入学時の有職率よりは減少している。以下、「さらに勉学を続けた」「結婚した」の順であるが、勉学を続ける者は増加傾向にある。新たに就いた職種では、「教員」がずば抜けて多く、「事務・秘書」「栄養士」「福祉指導」が続いている。このように卒業直後には職業生活を選択する者が多く、後述するように

「通信」の教育が職業に生かされたものと思われる。在学中の職業を継続する者は減少傾向にあるが、対象者に入学時から教員が多いこともあり、卒業直後も教員を継続する者、新たに教員になる者が多く、その面では専門・資格を生かした進路となっている。つまり卒業時においても専門・資格を生かした家政学部像がみられる。しかし近年は入学者における教員の比率が低下しており、また教員採用状況の厳しさを反映してか資格取得者も、教員になる者も減少傾向にあり、進路の多様化傾向がみられる。

6) 卒業後の家政学部像

卒業後の家政学部像について、「通信」における学習の卒業後の生活、すなわち「日常生活」「職業」「社会的な活動」への影響と全人的な発達への影響から検討する。

まず「日常生活」に「生かされている」とする者が90%と圧倒的多数を占める。その理由として「広い視野で考えることができる」「生きていく上で精神的な支えを得た」が共に多く、以下「よい友人を得ることができた」「専門的知識や技能が身についた」「自分の価値観を形成できた」の順である。また「職業」の面でも「生かされている」者が80%と多数を占め、理由として「専門的知識や技能が身についた」がずば抜けて多く、次いで「広い視野で考えることができる」で、以下「所属学科以外の知識が身についた」「よい教員と出会うことができた」の順である。最後に「社会的な活動」では「生かされている」者は65%と日常生活や職業の場合に比べると低くなっているが、生かされている理由としては「広い視野で考えることができる」が最も多く、以下「自分の価値観を形成できた」「リーダーシップが身についた」「生きていく上で精神的な支えを得た」「専門的知識や技能が身についた」の順である。

このように80%以上の卒業生では、「通信」での教育が家庭生活および職業に生かされ、65%の卒業生で社会的な活動に生かされている。

次に「通信」の教育の全人的な発達への影響についてであるが、全人的な発達に「影響している」と答えた者が84.4%を占め、「どちらともいえない」が14.4%で、「影響していない」は1.2%とごくわずかである。「影響している」主な理由としては「卒業したことが自信・誇りになった」が最も多く、次いで「人間形成、生き方」「学習意欲・習慣、生涯学習」「最後までやり遂げる意志、努力」が多く、以下「広い視野、価値観、ものの見方」「創立者の教育理念、三代綱領」「友人・先輩との交流」の順である。これらの理由には「通信」独特の教育や学習形態に関わるものが多くみられるが、同時に広い視野や価値観、生き方などもあげられている。その一方で創立者の教育理念や三代綱領なども全人的な発達に影響している。

以上のように、卒業後の家政学部像は職業や日常生活、さらには全人的な発達に生かされるものとして捉えられているが、具体的には専門的知識や技能とともに、広い視野や

学科の枠をこえた幅広い知識の習得、価値観の形成や精神的な支え、リーダーシップ育成などが含まれている。

本調査にみられる「通信」卒業生では入学前、大学在学時、大学卒業時、卒業後と一貫して専門的知識や資格という職業・専門と関わる学部像と、その一方で教養や広い視野、価値観、人間形成といった本学の伝統的な教育の流れがみられる。

4. 家政学研究科修了生に対する調査から

1) 調査の目的及び方法

日本女子大学家政学研究科は、1961年に児童学専攻、食物・栄養学専攻が設置され、次いで1978年に住居学専攻、被服学専攻、1996年に生活経済専攻が開設され、家政学部5学科の上に大学院修士課程が設置された。また1992年には博士課程である人間生活学研究科が、人間発達学専攻、生活環境学専攻の2専攻として発足した。

このような状況をふまえ、家政学研究科修了生の大学院進学への動機、修了後の進路、社会活動の動向、大学院在学中に受けた教育の評価などを中心に、大学院修了生の実体を明らかにすることが、本調査の目的である。

調査対象は、大学院修了1回生である1963年3月から2000年3月の38回生までの全修了生703名である。全員に対して2000年5月にアンケートを送付し、郵送で回収する調査を行った。回収数は508名（児童学専攻106名、食物・栄養学専攻256名、住居学専攻88名、被服学専攻45名、生活経済専攻13名）で、回収率は72.3%である。

2) 調査対象者の概要

調査の対象となった修了生は、大学卒業後すぐに進学した場合には、1回生は62歳、38回生は25歳である。したがってかなり年齢の幅が広いが、実際に修了時の年齢をみると、最も多いのが24～25歳で、全体の65.4%であり、26～29歳、16.1%、30～39歳、11.3%、40歳以上、4.1%である。したがって、大学院の場合には、全体の三分の一は、大学卒業後すぐに進学した学生より年齢の高い学生が在籍していることになり、実際には62歳以上の修了生がいることになる。また、出身大学では、本学が69.0%を占めている。さらに、全体の70.2%が既婚者であり、子どもの数は、なし（19.3%）、1人（27.6%）、2人（39.1%）、3人以上（14.0%）である。

3) 入学前の家政学研究科像

入学前の状況は、全体の71.3%が大学卒業後すぐに大学院に進学しているが、専攻別にみると、被服（以下、専攻を省略）が最も割合が高く（84.4%）、次いで食物・栄養（75.0%）であり、生活経済は最も低く（46.2%）になっている。生活経済は、開設されてから年数が浅く、いったん社会に出てから現職のまま大学院に進学した者が多いことがわかる。

また住居では就職後退職して進学した者が29.2%になっていることは、専攻の特徴を表しているといえる。食物・栄養でも19.5%であり、同様の傾向がみられる。

日本女子大学家政学部100年研究会

江 澤 郁 子 (研究代表者・名誉教授・戸板女子短期大学学長)

一番ヶ瀬 康子 (名誉教授)

館 岡 孝 (名誉教授)

大 野 静 枝 (名誉教授)

小 川 信 子 (名誉教授)

宮 崎 礼 子 (名誉教授)

沖 田 富美子 (住居学科教授)

佐々井 啓 (被服学科教授)

真 橋 美智子 (教育学科教授)

赤 塚 朋 子 (宇都宮大学助教授)

塚 原 典 子 (新潟医療福祉大学助教授)

日本女子大学家政学部100年の歩み

日本女子大学家政学部100年研究会 編

2006(平成18)年5月20日 初版第2刷発行

発行者 日本女子大学家政学部100年研究会

〒112-8681 東京都文京区目白台2-8-1

印刷・製本 有限会社 三秀美術印刷